

第26回 Tシャツアート展

潮風に1222枚ひらひら



写真協力:NPO砂浜美術館

第26回Tシャツアート展 2万人がひらひらの風景を満喫

5月3日から7日まで、入野の浜で「Tシャツアート展」が行われ、過去最多となる約2万人が来場しました。

応募作品数も過去2番目に多い1222枚。一般応募作品のほか、愛知県豊田市や宮城県気仙沼市、千葉県九十九里浜から届いた「ひらひらフレンドシップ」の作品群や、障がい者施設や書道教室の仲間らと応募したグループ作品、町内各地区の高齢者と年少者のツーショット写真を集めた「地区の元気印◎」など、見ごたえたっぷり作品が並びました。

審査員と美術館創設メンバー 砂浜で「ひらひらトーク」

2日の夕方、展示作業を終えた砂浜で、今年の審査員を務めたデザイン活動家のナガオカケンメイさんと、高知県在住のデザイナー・梅原真さん、砂浜美術館設立に携わった町役場職員によるトークイベントを開催。約60人のギャラリィを前に、「砂浜美術館」の楽しさや素晴らしさを語りました。

ナガオカさんは、「美しいだけ



ひらひらトークの出演者と、ボランティアスタッフたち。

じゃ長く続かない。Tシャツアート展が26回も続いているのは、自分たちのペースで楽しくやってきたから」と称賛。また、第10回までTシャツアート展実行委員長を務めた松本敏郎さん(現情報防災課長)は、「砂浜美術館の、人と自然のつきあいかた」という考えは、まちの防災計画にも生きている」と説明しました。

自然そのままを美術館としてとらえ、新しい価値観を創造する「砂浜美術館」の考え方は、黒潮町のまちづくりの基本理念にも位置づけられています。



1.ナガオカケンメイさん(左)と梅原真さん(左から2番目)と楽芸員のひらひらトーク。 2.今年の大賞作品はお孫さんとのツーショット写真(連作)! 3.今年のボランティア(Tボラ)は大学2年生のふたり。 4.大人がはまる砂像体験。 5.Tシャツ型の紙にお絵かき。 6.キャンドルナイトの準備をしてくれた大方高校生徒会の皆さん。 7.Tシャツ型のキャンドルをまあるく並べて。 8.かわいい歌声と本格的なギター「モネツム」。 9.全員がTボラ経験者の4人姉弟が砂浜に集合! 10.ビーチサンダルの砂像と、ビーチサン飛ばし大会。 11.黒潮町ならではの砂浜結婚式。 12.今年の地区Tシャツ「地区の元気印◎」には、素敵なツーショット写真がいっぱい!

**砂像体験、キャンドルナイト：
砂浜美術館を味わう5日間**

期間中は、会場周辺に地区内外の特産品などのお店が並び、日替わりのイベントも開催。観光客も地元の方も、一緒になって楽しんで5日間でした。

4日に行われた「初夏のぶらぶらしませんか?」には、高知市や愛媛県などから10人が参加。海の王迎駅から入野の浜まで約4キロの海岸線を、スタッフの案内でゆっくりと散策しました。



(関連記事4ページ)

ボランティアスタッフの声

◆長谷川映見さん(京都府)

地域の人のパワーがすごかった。ボランティアとして手伝いに来たはずなのに、浜でも(宿泊先の)蜷川でもたくさんのパワーをもらいました。

高知大好き!!

◆吉岡遥菜さん(千葉県)

「楽しそう!」と思って、応募して、来たら本当に楽しかった!! また帰ってきます。皆さん本当にありがとう!!

**カツオのぼりと鯉のぼり
伊与木川の上空を泳ぐ**



橋や堤防には、Tシャツや紙のこいのぼりを展示。道の駅「なぶら土佐佐賀」から歩いてくるお客さんも多く見られました。

ゴールデンウィークの風物詩となったカツオと鯉のぼりの川渡し。今年も4月末から約2週間、坂折地区の伊与木川に展示されました。5月3日に行われた川渡しフェスティバルには、4月にオープンした道の駅「なぶら土佐佐賀」から来る人の流れが途切れず、約3000人が来場。佐賀中学校吹奏楽部の演奏や、パントマイム、地域産品の販売などを楽しみました。紙のこいのぼり作成教室には、子どもだけでなく大人の参加もあり、用意していた32匹があっという間に終了。また、午前と午後の紙のこいのぼりのプレゼントも、子どもたちに好評でした。